

市場における山菜取引の実態について

—札幌市中央卸売市場を例に—

森林総研北海道 高橋正義
森林総研 松浦俊也

背景および目的

我が国における平成 20 (2008) 年の林業産出額 4,449 億円のうち、木材生産は 48% にあたる 2,133 億円であったのに対し、キノコ等の特用林産物など木材以外の産出額は 2,316 億円と木材生産を上回った(3)。林業関連産業にとって特用林産物は木材と並ぶ重要な林産物である。

生態系サービスとは生態系から人々にもたらされる便益の総称で、相互に深く結びついた 5 つのサービス、すなわち供給サービス (Provisioning services)、調整サービス (Regulating Services)、文化的サービス (Cultural Services)、基盤サービス (Supporting Services)、保全サービス (Preserving services) の分類される(2)。特用林産物のうち山菜やきのこに代表される天然の特用林産物は供給サービスや文化的サービスを提供していると考えられる。

生態系サービスや生物多様性の経済的な評価によって、そこに生じている問題の大きさや対策の必要性、重要性をより多くの人に理解を促すことが出来る。生態系と生物多様性の経済学 (TEEB) は生物多様性がもたらす世界経済への関心を高め、生態系の劣化にとまらぬ生物多様性の消失によって生じる経済的な損失とその解決を促すことを目的とする国際的な取り組みで、生態系や生物多様性の損失を回避するための政策オプションや取り組み事例、ツールなどを紹介している(8)。北海道で山菜に関する研究は山菜加工施設に関する研究(2)や山菜採取場所の有料開放に関する研究(7)などがあるが、経済的な評価に関する研究はほとんどない。そこで生態系サービスから見た山菜の経済的評価手法を開発するために、主要な市場の一つであり山菜の取引情報が整備されている札幌市中央卸売市場を例に山菜取引の実態を明らかにすることを目的とした。

資料および方法

まず日本国内のおよび北海道内の山菜取引の動向について把握するため、特用林産物需給動態調査(4) (以下、林野統計) および北海道特用林産物統計(1) (以下、北海道統計) を用いて山菜の生産量の推移を調べた。林野統計は主要 11 品目 (ワラビ、ゼンマイ、フキ、ウド、チシマザサ、タラノメ、アザミ、サンショウ、ジネンジョ、ツワブキ、マタタビ) を含む全国の山菜生産量について都道府県別、天然および人工の種別に集計された統計である。北海道統計は主要 5 品目 ((チシマザサ、ゼンマイ、

ワラビ、フキ、ウド) について地域別、天然および人工の種別の生産量および生産額を、また 4 品目 (タラノメ、ギョウジャニンニク (以下、ヒトビロ)、コゴミ、水ワサビ) について生産量を集計した統計である。

続いて、札幌市中央卸売市場 (以下札幌市場) での山菜取引の動向について札幌市中央卸売市場青果部市況情報のうち、毎年まとめられる年報と毎月公表される月報を用いて分析した。札幌市中央卸売市場食品別取り扱い要領、山菜取り扱い要領によれば、札幌市場に上場できる山菜は、アサツキ、アザミ、ウド、ウワバミソウ、エゾイラクサ、エゾノリュウキンカ、エゾヨモギ、オカヒジキ、オランダガラシ、カタクリ、ヒトビロ、コゴミ、シャク、スギナ、セリ、ゼンマイ、タラノメ、チシマザサ、ノビル、ハマボウフウ (以下、ボウフウ)、ハワサビ、フキ、フキノトウ、ミツバ、モミジガサ、ユキザサ、ヨブスマソウ、ワラビの全 28 品目に限定されている。

結果および考察

図-1 に林野統計による 2005 年から 2009 年までの山菜生産量を示した。山菜は全国で約 20 千 t の生産があり、このうち北海道は約 2.5 千 t、東北地方では約 30-40 千 t が生産されていた。ここ 5 年の生産量の推移は漸減傾向であった。このうち天然ものは全国で約 5-6 千 t であり、そのうちの約半分である約 2-3 千 t が東北地方で、1/4 約 1.5 千 t 程度が北海道で生産されていた。生態系サービスの観点から見れば、山菜の供給サービスはそのほとんどが東北、北海道地域で提供されているといえた。

続いて、北海道内で 2008 年に生産された山菜量をず-2 に、主要 6 品目の人工天然別の生産割合を図-3 に、山菜 9 種の 2003 年から 2008 年の生産の推移を図-4 に示した。北海道で最も生産量が多いのはフキであり、2008 年に 1731.9t 生産されていた。次に多いのは 2008 年に 263.4t が生産されたウド、さらに 92.0t のワラビ、63.2t のネマガリダケと続いていた。全国から見て生産量の多いゼンマイは約 3,000kg と少なく、コゴミの 3,500kg であった。タラノメは 1,500kg、水ワサビは 2,000kg であった。ヒトビロは 7,000kg ほどであった。この 5 年間の生産の推移を見ると、ヒトビロ、タラノメなど生産量が増加傾向にある山菜と減少傾向にあるフキ、ゼンマイ、年変動が非常に大きいその他の山菜と見ることが出来る。2008 年の天然、人工比を図-4 に示した。75% が人工ものが多いのはタラノメのみであり、ほとんどの種は天然も

のが多かった。とくにゼンマイ、ワラビ、ネマガリダケは全量が天然のものであった。

札幌市場の青果部における取引量の推移を図-5に取引額の推移を図-6に示した。なお、札幌市場の統計では、ウド、ネマガリダケを含むタケノコは根菜に、ヒトビロ、フキは葉茎菜に分類されており、山菜にはワラビ、タラノメ、ボウフウ、個別7品目以外の21品目をその他の山菜類としている。2000年以降札幌市場青果部では年間約300千tの取引があるが、そのうち野菜は約250千tで取扱量に大きな変化はない。上場指定28品目のうち、別分類のウド、タケノコ、ヒトビロ、フキを除いた山菜24品目の取扱量の変化をみると最も多かった2002年には587.0tの取り扱いがあったが、その後徐々に減少し、2009年は野菜取扱量の0.14%である370.0tであった。道内産の取扱量は最も多い2003年で356.6tであったが、2009年には229.0tと漸減傾向であった。取引額で見ると、2000年以降、青果部門で約600億円、うち野菜が約400億円の取引であった。山菜は2003年には3.3億円であったのに対し、2009年には野菜取扱額の0.58%、2.3億円に減少していた。道内産に限っても2002年は2.2億円であったが、2009年には1.5億円まで減少していた。2009年の野菜に占める山菜の取扱量割合に対して取扱額割合は4倍以上であることから、山菜は一般的な野菜と比べて単価が高い商品であるが、取扱量、取扱額とも漸減しつつある商品と言える。

2009年の種類別取扱量について、取扱量の多い7品目(ウド、タケノコ、ヒトビロ、フキ、タラノメ、ボウフウ、ワラビ)とその他に分け図示したものが図-7である。これを見ると最も多いウドは96.3tの道内産と71.0tの道外産が取り扱われた。市場関係者によれば、道内産は栽培された人工ものはわずかでほとんどが天然のものであるのに対して、道外産は全量人工であった。フキは道内産が87.1tに対して道外産は6.3tと道内産中心の商品であった。同様に、タラノメ(道内産5.9t、道外産0.9t)、ワラビ(道内産4.8t、道外産0.5t)、ヒトビロ(道内産34.3t、道外産0.1t)も道内産が中心であった。逆に道外産が多いものはタケノコで道内産19.4tに対して道外産が55.5tであった。ただし道内産はほぼ全量がネマガリダケの若芽であるが、道外産は多くがモウソウチク等の若芽であり、品種が異なる。ボウフウは道内、道外産の取り扱い量が拮抗していた(道内産、道外産ともに1t)。

取扱額で見るとウドは道内産4,330万円、道外産3179万円の7,509万円であった。最も取扱額が多いヒトビロは6,380万円、うち道内産は6327万円であった。取扱量の多かったフキの取扱額は1,851万円と道内産は1,628万円であった。タケノコは3,700万円(道内産1,107万円)ワラビは311万円(道内産219万円)、タラノメは1,826万円(道内産1,462万円)、ボウフウは480万円(道内産320万円)であった。取扱量と取扱額から算出したkg当たりの平均単価で見ると最も高いのはヒトビロで道外産7,702円、道内産1,842円であった。次に高額なのはタラノメで道外産4,077円、道内産2,489円であった。ワラビは道内産は460円であったが、道外産は1,998円と高額であった。ボウフウは道外産が1,624円に対して道内産は3,044円と道内産のものが高かった。一方でウド、タケノ

コ、フキは平均単価が低く、道内産、道外産ともに200-600円程度であった。

山菜を生態系サービスの面から評価するためには天然ものの取引に限る必要がある。そこで山菜に関する市場関係者への調査から山菜取引の動向と主要取り扱い品目についての天然、人工比率を把握した。一般に山菜は通年ではなく春など季節に限られる商品であり、かつ品質が劣化しやすく長距離輸送に不向きな商品である。近年取引が減少傾向であるのは山菜を得意としていた中小の小売店が減少していること、あく抜き等調理に手間がかかることから若年層を中心に敬遠されたためと市場関係者は分析していた。タケノコは道内産は全量がチシマザサの若芽で天然のものであるが、道外産はモウソウチクなどの若芽でほぼ全て栽培のものである。フキは、道内産はほぼ全量が天然である一方、道外産は栽培もの、ヒトビロは道内産の8割は天然で、道外産は全て栽培のものであった。ウドは天然ものが6割、栽培ものが4割で道内産と道外産は出荷時期が異なること、ワラビについては道内産は全量天然、タラノメは道外産は全て栽培もので道内産のうち5割が天然ものだが、道内産も近年栽培ものが増加していることが明らかになった。

ヒトビロの2009年月別取扱量と単価について図-9に示した。ヒトビロは12月から6月までの7ヶ月間に取引があり、7月以降11月までは取引がなかった。特に道外産は12月から3月までの4ヶ月間のみの取り扱いであった。単価を見ると道外産は高額で月別の変動が少なかった。一方の道内産は1月から3月は道外産の6割程度の価格ではあるが比較的高値で取引されていた。しかし、取扱量が急増する4月に入ると価格は低下しそのまま取り扱いがなくなるまで低価格のままで推移していた。天然ものが出荷は雪解け後であるため、積雪期の3月までの出荷分は産地を問わずほとんどが栽培ものと考えられる。道外産が比較的高値である理由として、年明けから天然ものが出るまでの品薄期に市場の要求に答えるような商品を栽培して出荷しているためと推察された。このような春先に高値で栽培ものが取引され、天然ものが出荷されるようになると価格が低下するという値動きをする傾向はほぼ全ての山菜で見られた。一般に市場の取引価格は需要と供給の関係で決まるが、山菜でも商品の特徴である栽培ものか天然のものであるかはあまり重要視されていないといえる。

以上、2009年道産取引額と市場関係者の聞き取りによる天然ものの割合を用いて札幌市場における道内産かつ天然もの取引額の推計を試みた。タケノコ、フキ、ワラビは道内産を全量天然ものと見なし、それぞれ1107万円、1,628万円、219万円であった。ヒトビロは道内産の8割が天然ものとした場合5,062万円、ウドは天然ものが6割とみなし2,598万円、タラノメは道産の5割が天然ものとして731万円と推定した。これら6種の合計は11,345万円であった。

まとめ

山菜の生産量について各種統計を分析し、北海道、東北では天然ものが多く産出されていること、市場では天

然ものか栽培ものと比較して一般に単価が安いこと、などを明らかにした。さらに札幌市場での山菜取引量、取引額、個別の単価等の取引動向を分析し、山菜の主要7品目のうち、道産、天然ものの取引総額は約1.1億円と推定された。札幌市場における山菜の取引傾向として、栽培ものが天然ものに先駆けて高値で取引されていること、天然ものの出荷とともに栽培ものは市場からは消えること、続いて出荷する天然ものは大量に出荷されるため単価が低下することなどが明らかになった。

一般に山菜は圧倒的に自家消費や個人売買等市場外での取引が多く、市場での取引は氷山の一角に過ぎない。しかし、わずかであっても市場での取引を調べることはその地域の山菜利用の実情を理解することや山菜利用の実態を推定し、山菜の持つ役割を生態系サービスから見る上で有益な情報となる。

札幌市中央卸売市場関係者（札幌市、札幌市中央保健所、仲卸2者）には本研究に必要な情報の提供と調査への協力を賜りました。ここに記し、感謝いたします。

引用文献

(1) 北海道 (2009) 平成 20 年北海道特用林産統計 14pp

(2) Millennium Ecosystem Assessment(2005) Ecosystems and Human Well-being: Synthesis. 137pp Island Press (横浜国立大学 21 世紀 COE 翻訳委員会 (2007) 生態系サービスと人類の将来—国連ミレニアムエコシステム評価. 241pp オーム社)

(3) NIGI Takao(1989) Production and Processing Facilities for Edible Wild Plants in Hokkaido. RESEARCH BULLETINS OF THE COLLEGE EXPERIMENT FORESTS HOKKAIDO UNIVERSITY, 46(1) 1-14

(4) 林野庁 (2010) 平成 21 年特用林産物需給動態調査

(5) 札幌市中央卸売市場年報
<http://www.sapporo-market.gr.jp/market/year/indexf.htm>

(6) 札幌市中央卸売市場月報
<http://www.sapporo-market.gr.jp/market/seika/index.htm>

(7) 高橋正義 (2005) 北海道国有林における有料開放について. 日林北支論 53:132-134

(8) TEEB (2010) The Economics of Ecosystems and Biodiversity: Mainstreaming the Economics of Nature: A synthesis of the approach, conclusions and recommendations of TEEB.

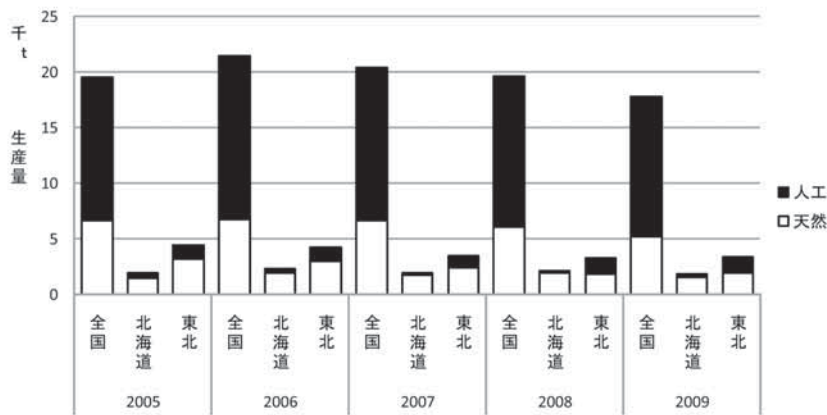


図-1 山菜生産量

2008年 単位:t

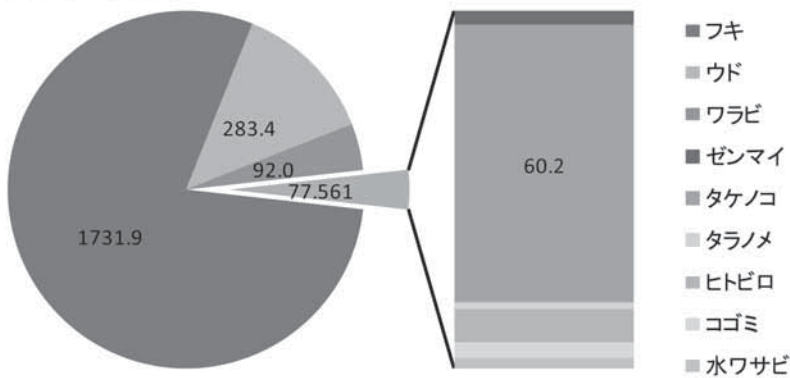


図-2 2008年北海道における山菜生産量

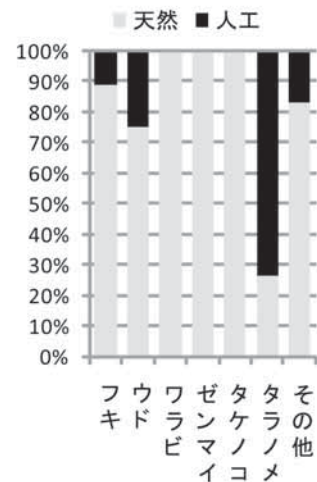


図-3 2008年北海道における主要な山菜生産の人天割合

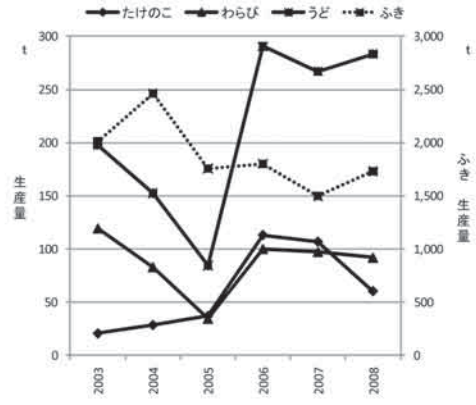
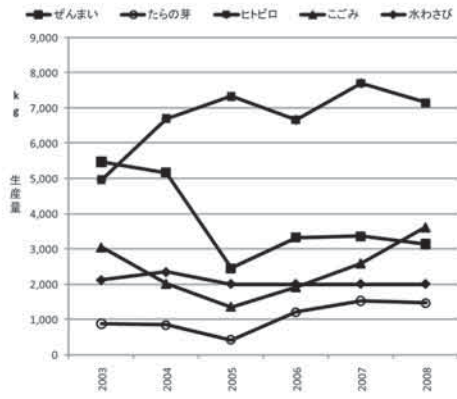


図-4 北海道における山菜生産の推移

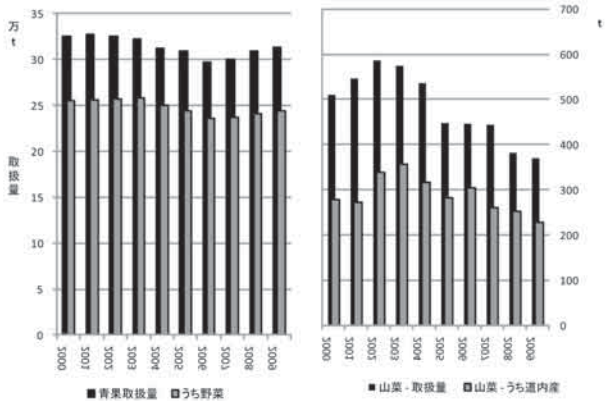


図-5 札幌市場青果部における取扱量の推移

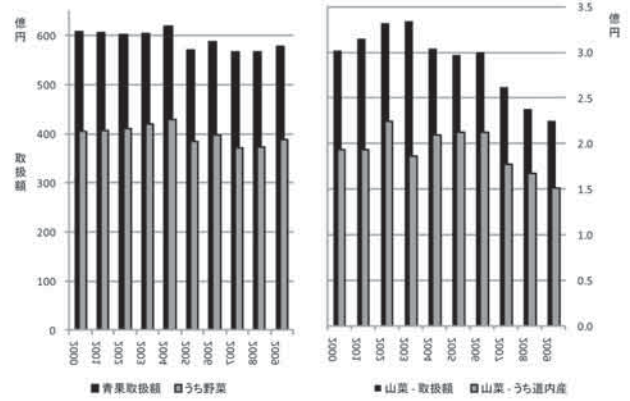


図-6 札幌市場青果部における取扱額の推移

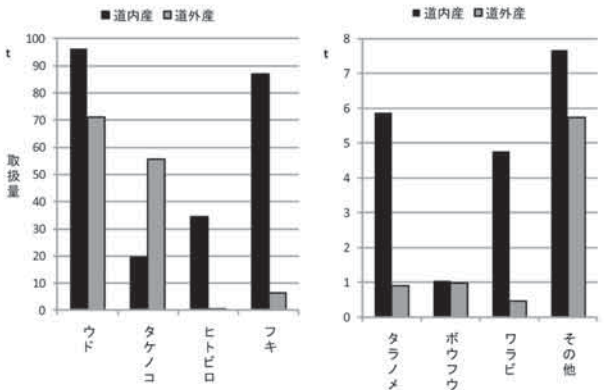


図-7 2009年札幌市場における主要な山菜類の取扱量

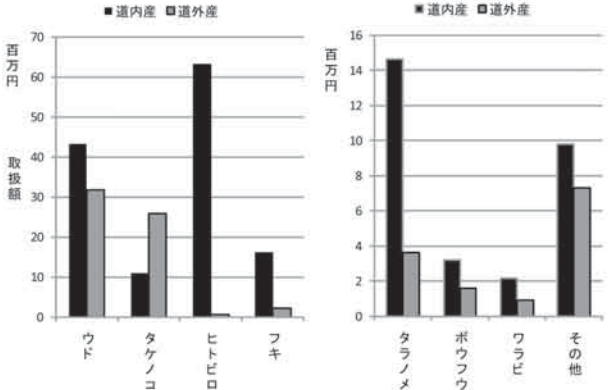


図-8 2009年札幌市場における主要な山菜類の取扱額

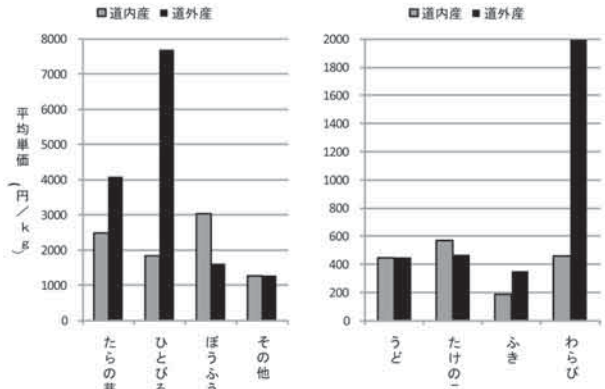


図-9 2009年札幌市場における主要な山菜類の平均単価

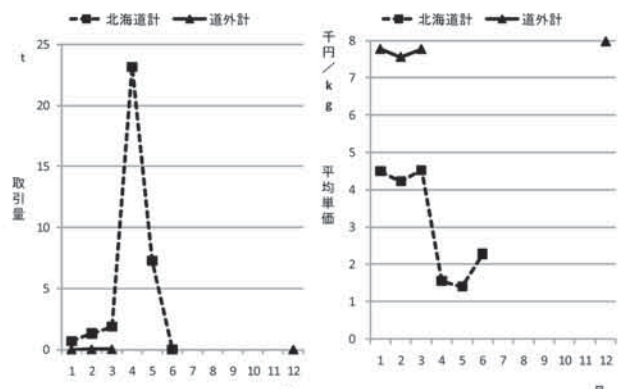


図-10 2009年におけるヒトビロの月別取引量と平均単価